

経済のあり方の変化に伴う

生命感覚および他者感覚の衰弱

——その克服のための一試論

三谷 竜彦

序

資本主義経済に代表される大規模流通システムの発展は、人々に様々な影響を与えた。中でも小規模な伝統的地域社会の経済が大規模流通システムに飲み込まれたことは、とりわけ大きな影響力を持ったと考えられる。極めて大雑把に、そして図式的にいえば、大規模流通システムに飲み込まれる以前の伝統的地域社会の経済は、概ね自給自足に近く、外部との交易も限定的で、多くの場合生産者の顔が見える範囲内にとどまっていたといえよう。それが大規模流通システムに包摂されることによって、消費物資を外部から、しかも顔の見えない匿名の生産者から、手に入れるというあり方へと変わって行った。このような変化は、いったいどのような含意を持ったであろうか。つまり、自分たちが、あるいは顔の見える特定の生産者が、生産したものを、自分たちが消費するという経済のあり方から、顔の見えない匿名の生産者が生産したものを、自分たちが消費するという経済のあり方へと変化したことが、具体的にどのような影響を人々にもたらしたであろうか。差し当たり二つのことが考えられる。一つは、食肉生産者の匿名化、したがって食肉生産のブラックボックス化による、生命感覚の衰弱、すなわち生命への配慮の鈍化である。もう一つは、住居等大型のものも含む道具の生産者の匿名化、したがって道具生産のブラックボックス化による、他者感覚の衰弱、すなわち他者への配慮の鈍化である¹⁾。これら二つのことは、現代人の倫理性一般に対して悪影響を及ぼしていると考えられる。したがって我々

は、それら二つのことが生起しないような経済のあり方の可能性を、探求する必要があるということになる。 (本稿において「現代 (人)」というとき、それは理想的には「大規模流通システム下 (に生きる人の多く)」を指しているが、実際にはたいていの場合もう少し限定して「現代先進資本主義諸国 (に生きる人の多く)」を指している。それに対して「昔 (の人)」等というとき、それは「大規模流通システムに飲み込まれる以前の伝統的地域社会 (に生きる人の多く)」を指している。)

本稿は、まずそれら二つのことをできる限り詳細に分析し、それぞれの問題性を明確化する (1 節および 2 節)。その上で、それら二つのこととなるべく生起しないような経済のあり方の可能性を、探求することにする (3 節)。

1. 食肉生産のブラックボックス化による生命感覚の衰弱

食肉生産がブラックボックス化したことによって、人々の生命感覚は衰弱した。この事態を分析するために、我々はまず犠牲という現象を分析することにした。なぜなら犠牲という現象の分析が、人々の生命感覚の衰弱という事態を分析する上で、決定的な鍵となると考えられるからである。

1-1. 犠牲

そもそも犠牲とは何であるのか。まずは犠牲の概念を定義したいと思うが、その作業は、我々が日常言語において犠牲という語をどういう意味で用いているかということに依拠して、行うことにしたい。そうすると答えは次のようになると思われる。すなわち犠牲とは、自発的であれ非自発的であれ、他者にとって価値あるもの (主として生命) を保護するために、自分にとって価値あるもの (主として生命) を失うこと、およびその者である——その際の他者には、例えば国家や民族のような共同体も含まれるし、あるいはまた神やそれに類するものも含まれるし、ともかく何らかの仕方では自分とは他であるところの者全てが含まれる——と。あるいはもう少し簡単に、自発的であれ非自発的であれ、他者の利益のために自分が損害を被ること、およびその者であるといってもよ

いであろう⁽²⁾。例を挙げれば、駅のホームから転落した人を助けて自分が命を落とすこと、およびその者や⁽³⁾、自爆テロをすること、およびその者や、何者かに食べられること、およびその者等である。もしかしたら最後の例に関して違和感が持たれるかもしれないが、そもそも犠牲は、例えば犠牲獣という言葉があるように、人間にのみ妥当する現象ではない。最後の例が適用されるのは、多くの場合は人間以外の存在者であろう。そして後の議論を先取りしていえば、我々による犠牲現象の分析において主題となるのは、人間以外の動物の犠牲である。

ところでここで一つ疑問が提出されるかもしれない。それはすなわち、例えば「鉄道事故の犠牲になった」といういい方を我々はしばしばするが、この例は先ほどの定義に当てはまらないのではないかという疑問である。確かに当てはまらない。なぜなら「鉄道事故の犠牲」と呼ばれる事象には、他者の利益への貢献という契機が欠落しているからである。だがそもそも「鉄道事故の犠牲」といういい方は正しいいい方なのであるか。この事象はそもそも端的に損害を被ることであるから、本来は犠牲ではなく被害にカテゴライズされるのがふさわしいように思われる。この種の事象が犠牲と呼ばれるようになったことには、何らかの理由があるだろうと思われるが⁽⁴⁾、いずれにせよ我々としては、この種の事象はやはりあくまで被害であって、これを犠牲とは見なさないという立場をとりたいと思う。したがって先ほどの犠牲の定義は変更することなく、そのまま維持したいと思う。

ところで我々は一般に、他者が損害を被り犠牲になることによって、自分が利益を獲得したり保持したりしたとき、その他者に対して負い目を感じる。この点が、以下の議論にとって何よりも重要な点である。再度確認するが（ただし、今述べたことを逆方向にたどるという仕方であるが）、負い目は、自分の利益の獲得・保持と、他者の損害という、二つの要因に基づいて、生じてくる。したがってそれら二つの要因がなければ負い目は生じないということになるのであるが⁽⁵⁾、我々が今から考察しようとしている、本題の食肉生産・消費、つまりこれは動物の非自発的犠牲という意味を持つのであるが、これにおいて、まさにそれら二つの要因が現代においては多くの場合ほとんど覆い隠されてしまっており、したがって負い目が極めて生じ難くなってしまっているという、現実がある。この現実には、現代人の生命感覚の衰弱の一因となっていると

考えられるものである。我々はこの現実を子細に分析しなければならない。

1-2. 食肉生産のブラックボックス化による生命感覚の衰弱

今述べたように食肉生産・消費は、動物の非自発的犠牲という意味を持っている。つまりそれは、動物が非自発的に我々人間の生命のために自らの生命を失うことという意味を持っている。したがって本来であれば、そこには受益者としての我々人間における負い目の生起が随伴するはずである。しかし現代に生きる我々において、そのような負い目が生起しているかと問われるならば、おそらくほとんど生起していないと答えざるをえないであろう。それはなぜか。答えはすでに述べた通り、負い目が生じるための二つの要因、すなわち自分の利益の獲得・保持と、他者の損害とが、ほとんど覆い隠されてしまっているからだとなろう。このことについて、もう少し詳しく見て行くことにしよう。

おそらく現代は、かつてないほどに生命が手厚く保障されている時代であろう。極めて一般化していえば、生きることはかつては文字通りの意味で大変有り難いことであったのに対して、現代においては当たり前でありきたりなことになってしまっている。その結果、そもそも生きることは人間にとって最重要価値の一つであるだろうが、現代においてはその価値の重みがそれほど感じられなくなっているように思われる⁶⁾。そして生きることの価値がそれほど重みのないものになり、日々生きていられるということに対してそれほど利益が感じ取られなくなると、その利益を供与してくれているものの存在、その最たるものが人間の食べ物となって死んで行く動物の存在であろうが、それが顧慮されるということもあまりなくなってしまうであろう。

しかしそれでも、自分たちの食べ物となるべく動物が殺されるという食肉生産の場面に身近に接することができるならば、動物が被る死という損害と、それによって自分たちが受ける生という利益とが、やはりそれなりにヴィヴィッドに感じられるであろう。そしてそこには負い目の生起が随伴するであろう。しかし現代においては、そうした食肉生産の場面に接する機会がほとんどない。かつて自分たちが生きるために自ら動物を殺していた人たちは、やはり負い目を抱いていたであろう。そのことは、負い目を軽減・解消するという機能を持ちうる様々な儀礼等、

例えば供養することや何らかの仕方（主として神の意志によるとか神の許しを得ているとかいった仕方）で意味づけて正当化すること等を、そうした人たちが開発・伝承してきたということによっても、ある程度裏づけられよう⁽⁷⁾。やはり自分たち自身で食肉生産・消費を行ってれば、自然と負い目は生じてくるものであろう。ところが現代人はたいてい食肉を消費はするが生産はしない。つまり動物を食べはするが自ら殺すことはしない。それどころか、自らが食べる動物が殺されるという場面を見ることすらほとんどない——現代人にとって見えているのは、凄惨な殺害の匂いも、あるいはかつて生命あるものであったという名残すらも、巧妙に拭い去られた、値札のついた一つの商品にすぎない——。このように食肉生産がブラックボックス化したことは、現代人から、動物が被る死という損害を、それによって自らが受ける生という利益もともに、ほとんど覆い隠してしまっているであろう。そしてそこには、もはや負い目が生じる可能性はほとんどないであろう。そして負い目が生じなければ、犠牲となって死んで行く動物の生命が重い価値のあるものとして感じ取られることもほとんどないであろう。このことは畢竟、現代人において生命感覚を鈍らせ、衰弱させてしまっているように思われる。それは人間以外の生命に関してだけでなく、幾分か人間の生命に関しても妥当するような気がする。もちろんこれは推測の範囲内にとどまりはするが。

2. 道具生産のブラックボックス化による他者感覚の衰弱

道具生産がブラックボックス化したことによって、人々の他者感覚は衰弱した。この事態を分析するために、我々はまず、概して現代人は道具を粗末に扱っているのに対して、昔の人は大切に扱っていたといわれるが、このことの理由を探ることから考察をはじめたい。なぜならその理由を明らかにすることが、人々の他者感覚の衰弱という事態を分析する上で、決定的な鍵となると考えられるからである。

おそらくその理由には二つあるであろう。一つ目は、昔は物が少なかったということである。つまり、現代のようにちよつと使つてすぐ捨てるということが出来るほど、そもそも物質的に豊かではなかったという

ことである。だが我々が着目したいのはこの理由ではなく、もう一つの理由である。それはすなわち、昔は自分たち自身が、あるいは少なくとも顔の見える特定の誰かが、道具を作って、それを自分たちが使っていたということである。つまり道具は、自分たちないしは顔の見える特定の誰かが使うのであるから大切に作られ、また自分たちないしは顔の見える特定の誰かが作ったのであるから大切に扱われたのである。そしてこのことは、少し視点を変えれば次のことを意味する。それはすなわち、日々用いられ、身の回りにある道具には、特定の他者（今は亡き人も含む）のイメージが焼きついてきたということである——もちろん自分一人で作って自分一人で使うという、おそらく比較的稀なケースは除く。ほとんどあらゆる道具が、例えば母が作ってくれたり、父が直してくれたり、近所のおじさんたちが建ててくれたり等したものであり、それらの道具にはそれらの人々のイメージが染みついていたのである⁶⁾。そしてこのことはさらに、道具を介して人と人との密接なつながりがあったということの意味しているであろう。つまり、誰か特定の他者のイメージを宿した道具の日々の使用という、おそらく最もありふれた日常生活の中で、その道具を介して、そうした他者との親密な共存在が実現されていたということである⁷⁾。ところが他方、現代においては、ほとんどあらゆる道具は、自分たちないしは顔の見える特定の誰かが作っているのではなく、顔の见えない匿名の誰かが作っている。ほとんどあらゆる道具は、特定の他者のイメージをほぼ一切帯びておらず、そこに我々が見て取るのはほぼ純粋に有用性のみとなってしまう。そのような道具に愛着を覚える等して、それを大切に用いようという気はなかなか生じないであろうし、そしてそのような道具を介しての他者との親密な共存在の実現は、ほぼ望みえないことであろう。このように現代においては、道具生産がブラックボックス化したことによって、道具に対する粗雑な扱いとともに、日々の最もありふれた生活の中での他者との親密な共存在の弱化という事態が生じることになったのである。この他者との親密な共存在の弱化という事態は、現代人において他者感覚を鈍らせ、衰弱させてしまっているように思われる。

3. 地産地消

以上において述べてきたように、食肉生産および道具生産のブラックボックス化によって、現代人における生命感覚および他者感覚の衰弱が引き起こされてしまっているように思われる。そして冒頭において述べたように、大規模流通システムが小規模な伝統的地域社会の経済を併呑したことが、食肉生産および道具生産のブラックボックス化を引き起こしたと思われる。したがって食肉生産および道具生産のブラックボックス状態を改めることによって、現代人における生命感覚および他者感覚の衰弱を改善するためには、小規模な地域経済を大規模流通システムから自立させることが肝要だということになるであろう——もちろん完全に自立させることは、現代においては事実上不可能に近いと思われるので、あくまで可能な限りでという留保をつけなければならないが——。そしてそれは具体的には、地産地消という経済システムの導入を推進して行くことによって可能となるであろう。ではその地産地消という経済システムとは具体的にどのようなものであるのか。もちろんこれは今や相当に普及してきているものなので、改めてくどくどと説明する必要はないであろうが、本稿における議論に関係する限りでやはり述べておきたいと思う。以下、箇条書きで要点を述べることにする⁽¹⁰⁾。

3-1. 食肉の地産地消

- ①行政の支援を受けつつ、生産された食肉がなるべく狭い範囲内（例えば日本でいえば一つのJAが管轄する区域内）で流通・販売されるシステムを構築する
- ②販売される食肉への生産者名・牧場名等の表示を推奨する
- ③学校給食になるべく生産者名・牧場名等の分かる地場産食肉を用いる
- ④生産者と消費者との交流の機会を設ける
 - ・生産者自身による直売の機会を設ける
 - ・学校の遠足や社会見学等で牧場を訪問し、児童生徒に飼育等の体験をさせる
 - ・それ以外にも、消費者が牧場を訪問し、飼育等の体験のできる機会を設ける

3-2. 道具の地産地消

- ①行政の支援を受けつつ、手作りで道具生産を行う職人の養成を推進するとともに、その生産品がなるべく狭い範囲内で流通・販売・修理されるシステムを構築する
- ②販売される道具への生産者名・工房名等の表示を推奨する
- ③学校で使用される様々な道具(机や椅子等の備品から校舎に至るまで)になるべく生産者名・工房名等の分かる地場産品を用いる
- ④生産者と消費者との交流の機会を設ける
 - ・注文生産を推奨する
 - ・生産者自身による直売の機会を設ける
 - ・学校の遠足や社会見学等で工房を訪問し、児童生徒に道具生産の体験をさせる
 - ・それ以外にも、消費者が工房を訪問し、道具生産の体験のできる機会を設ける
- ⑤道具の自家生産・修理を推奨する

結び

地産地消は他にも、輸送距離の短縮により環境負荷を低減できるとか、生産者にとって生きがいになるとか、消費者にとって安心安全であるとか、様々な利点がある。その一方で、生産者にとって負担が大きいか、とりわけ道具の場合は概して高価になるとか、様々な問題点もある。だがこうした問題点は、行政や生産者組合や市民団体の支援のもと、生産者と消費者とが相互理解・協力することで解決して行くことができるであろう。少なくともそれが持つ利点の大きさを考えるなら、地産地消という経済システムの導入は、それらの問題点によって押しとどめられるべきではないであろう。一つ一つ問題点を解決しつつ、地産地消を着実に推進して行くことが望まれる。そしてそのことによって我々は、何よりも衰弱状態にある生命感覚および他者感覚を、少しずつであれ鋭く強いものにして行くことができるであろう。経済のあり方を変容させることは、我々の倫理問題を解決する上で大きな役割を果たすことができるのである。

注

- (1) 生命感覚の衰弱も他者感覚の衰弱も、もちろん他にいくつかの要因があるだろう。例えばしばしば指摘されているものとして、前者に関しては暴力的なテレビ番組や映画やテレビゲームの氾濫等、後者に関しては核家族化や競争社会化等がある。本稿で取り上げた食肉生産および道具生産のブラックボックス化は、それぞれ一つの要因にすぎない。だが主要な要因であることは確かだと思われる。
- (2) あるいは必ずしも他者という具体的な存在者の利益のためとは限られないかもしれない。なぜなら例えば正義や自由や民主主義等の抽象的理念のために犠牲になるということもありうるからである。だがそうした理念も結局は他者の利益へと還元されうると考えることも不可能ではない。いずれにせよ本稿では、理念のための犠牲については特に論及をせずにおいた。
- (3) その際もし命を落とさなかったならば、それは確かに「犠牲的行為」と呼ばれはするであろうが、しかし「犠牲になった」とはいわれないであろう。おそらくその際の「犠牲的」というのは、「もう少しで犠牲になりそうであった」ということを意味するのであると思われる。実際その者は「犠牲になって」はいないのである。このことから考えると、精確に「犠牲」と呼ばれるには、やはり自分にとって価値あるものを危険にさらすだけではなく、実際にそれを失うということが、必要条件になるのであろう。
- (4) あくまで推測の域を出ないが、一つの理由として次のことが考えられる。犠牲の代表例として挙げられるのは何よりも宗教的犠牲であるだろうが、宗教的犠牲による死は、抗い難い巨大な力によって強いられた悲劇的な死という側面を強く持っているであろう。一方、事故や災害等で命を落とすことは、やはり同様に、抗い難い巨大な力によって強いられた悲劇的な死という印象を強く与えるであろう。もちろん後者には、前者には含まれている、他者（この場合は神および宗教的共同体）の利益への貢献という契機が、完全に欠落していて、やはりそれは端的に被害でしかないのであるが、それでも抗い難い巨大な力によって強いられた悲劇的な死という面を共有していることが、後者を犠牲と呼ばせるようになったのではないかと思われる。
- (5) もちろんこれは犠牲の場合についていわれていることであり、犠牲以外の場合においては、自分の利益の獲得・保持という契機がなくても、とにかく何らかの仕方で自分が原因となって相手に何らかの損害が発生した際には、負い目は基本的に生じてくるものであろう。

- (6) このこともやはりまた、現代人の生命感覚の衰弱の一因となっているように思われる。
- (7) 例えば中村生雄『祭祀と供犠—日本人の自然観・動物観—』、法蔵館、2001年、主として4章を参照。ちなみに、中村もおおよそ同様のことを述べているが、絶対的な存在である（また、殺される動物とは直接的な関係のない）神に訴えることによって、負い目をほとんど根こそぎ解消してしまうような信仰的装置を内面化している人たちにとっては、おそらく根源的にはいまだ生じる可能性のあるはずの負い目が、少なくとも日常的にはほとんど生じることがないであろう。その人たちにとっては、食肉生産・消費に際して心の中にあるのは、基本的に神の存在であって動物の存在ではないであろう。
- (8) 現代においても、友人知人、ましてや恋人が作ってくれたものは、おそらく誰もがやはり大切に扱うであろう。昔はほとんどあらゆる道具が、このように特定の誰かのイメージを宿していたと考えてよいであろう。
- (9) 本節における分析に際してある程度参考にしたハイデガー『存在と時間』の中のいわゆる道具分析（第1編第3章A）においては、なるほど道具を介した他者との共存在（具体的には、製品製作に際して他者が考慮されていること）について触れられてはいるが、ごく簡単に触れられているだけで、そこに特に重要な意味は見取られていないようである（vgl. Martin Heidegger, *Sein und Zeit*, 17. Auflage, Max Niemeyer Verlag, 1993, S. 70-71）。そして結局道具存在は、有用性を基本的に意味する手許性（Zuhandenheit）に、還元されてしまっているようである。
- (10) 食肉の地産地消に関しては、主として農林水産省「地産地消推進検討会中間取りまとめ」(http://www.maff.go.jp/www/press/cont2/20050810press_5b.pdf)を、道具の地産地消に関しては、主として日本商工会議所「地場産業の再活性化に関する提言」(<http://www.jcci.or.jp/nissyio/iken/h0202320jibateigen.html>)を、それぞれ参考にした。